

大学病院の緩和ケアを考える会

ニュース・レター Vol.16

平成 23 年 9 月 10 日発行

大学病院の緩和ケアを考える会 事務局

〒142-8555 東京都品川区旗の台 1-5-8 昭和大学医学部 医学教育推進室

E-mail: da-kanwa@hkg.odn.ne.jp

http://www2.odn.ne.jp/da-kanwa/

編集責任者 高宮有介

- ご挨拶
- 「緩和ケアを語る会」報告
- 第 16 回総会・研究会を終えて

- 第 4 回日本緩和医療薬学会年會に参加して
- クールダウン「酒とインコとパチンコと家族」

ご挨拶

代表世話人 高宮 有介（昭和大学医学部医学教育推進室）

2011 年 3 月 11 日に東日本大震災が起こり、地震だけでなく、津波、原発と相次ぎ、亡くなられた方々、行方不明の方々の数も日を追って増加し、戦後最大の災害となりました。言葉もなく、心を痛める毎日です。震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、一日も早い復興を願っています。

私自身、何をすべきか、何ができるか、まだ、悶々と自問する日々が続いています。節電、義援金などはもちろんですが、私達がそれぞれ与えられた仕事をいのちがけで全うすることが、長い目で見て最大の支援であると考えようになりました。とくに緩和ケアは、死を前にした人の心のケア、愛する人を亡くした家族の心のケアを担ってきました。今後、震災された皆様、ご遺族となられた皆様の重要なケアになっていくと信じます。ただし、医療者としての使命も大切ですが、皆様自身も震災により、多くの心身の痛みがあると存じます。皆様自身、ご自愛ください。

さて、第 17 回大学病院の緩和ケアを考える会総会・研究会を、9 月 10 日（土）に昭和大学で開催いたします。昭和大学で当会をスタートして、17 年目を迎えることとなります。品川区の本院では、樋口先生を中心に緩和ケアチームが活動し、昭和大学横浜市北部病院では、岡本先生を中心に緩和ケア病棟が稼働しています。さらに、附属病院である藤が丘

病院や豊洲病院でも緩和ケアの活動が開始されています。ただし、大学病院は、先進医療を提供し、制度上も DPC（包括支払制度）の導入、平均在院日数の短縮化など、緩和ケアを展開するには大きな壁も存在します。

今回のテーマを「大学病院の緩和ケア～再び昭和大学から～」とし、大学病院の緩和ケアを見直し、再発信する機会と考えております。昭和大学で緩和ケアに関わる方、関わった方などと昭和大学の歴史を紐ときながら、次に繋がるエールを送りたいと計画しています。

まず、昭和大学の緩和ケアチームにとって、なくてはならない存在の梅田恵氏の報告から始まります。教育講演としては、腫瘍内科医師として患者と向き合う佐藤温先生、

緩和ケアの本質として、私、高宮も講演の時間を頂きました。締めは、元昭和大学の呼吸器内科医師で、私が最も尊敬する中島宏昭先生の特別講演「余命について」です。

また、報告、講演の合間に、当会で人気のある「ナースによるナースのためのワンポイントレッスン」を行います。テーマは、看護で関心の高いリンパ浮腫についてです。とくにリンパ浮腫予防のためのケアについて、リンパ浮腫セラピストの広田内科クリニックの水町ゆかり氏に、Q&A 形式で基礎から実践

的な内容をお示しいただく予定です。

昭和大学関係者の登場が多い印象があるかもしれませんが、他大学の方々であっても、参加頂いた皆様が、緩和ケア、臨床、人生において、多くの示唆

「緩和ケアを語る会」報告

横浜市立大学 斎藤真理

2010年12月18日15時半から、日本財団ビル会議室において、『井上武夫先生、白土辰子先生の緩和ケアを語る会』が開催された。

白土先生のご紹介は、日本大学医学部附属板橋病院看護部主任／緩和ケアチームの藤田智子さんがしてくださった。白土先生との出会いから最近までのエピソードをお話しいただき、とても心温まる思いがした。

白土先生は、ご自身の緩和ケアに携わるようになった経緯から、日本大学病院の中でいかに進めてこられたかを淡々と話された。「麻酔科が緩和ケアに向いているところ」に「頼まれたら断らない事」と「先を読んで瞬時に対応していけること」を挙げられていた。まさしく、緩和ケアドクターのあるべき姿だと思わされた。先生は、つい最近まで手術麻酔をかけられていたし、急ぐ時には横断歩道を駆けて渡るなど、まだまだ即決快諾速攻の側面があつた柔らかな笑顔の裏にはあるのだと改めて確認した。

ひとつの区切りをお迎えになった後で大学の教授職となり、他の分野において死生学・緩和ケアのご教鞭をおとりになり、いくつもの博士論文の執筆指導をされているところは、さすがと感じた。常に教育を大切になさっていることがうかがえた。

緩和ケアに携わる者たちに向けて、「バックヤードで十分に養生すること」を勧められた。白土先生はバレエやクラシック音楽などによって輝きを得、いつも必要とされる時に走って行けるようなご準備をされているのだと知らされた。

井上先生のご紹介は、秦野メディカルクリニック院長、黒子幸一先生にお願いした。黒子先生はたくさん写真の提示され、井上先生がいかに聖マリアンナ医科大学泌尿器科教室の発展に尽くされたかを、伝えてくださった。その写真の多くは、宴会や釣りの際に、心の底から楽しんでいらっしゃるお姿であつたが、井上先生のかわいらしさはずっと昔からで

や明日からの勇気と活力を得る機会となるよう鋭意、準備しております。一人でも多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

あつたことが髣髴とされ、なごんだ気持ちが会場に満ち溢れた。

井上先生のご講演は、「わが一生涯を振り返って」と始まったので、どんなに長くなるかと思つたが、ご用意なさったレジュメの通り、ポイントポイントを押さえ、いずこかの総理大臣のように視線を下に原稿を読むばかりのかすれ声ではなく、堂々と聴衆に向けて視線を配り、終始通るお声で、来し方行く末につき、じっくりとお話しされた。

幼い頃から、ご出身の島根において受けた、地域あるいはご家族からの「死の準備教育と言えることから」は、「死別の悲しみをいやし」「自らの死も怖くなくなる」ことにつながると説いた。言葉と態度が、家族、環境から子供に伝わるのだ。

井上先生が、「緩和ケアはいいことだ」と気付き、自らすすんで求め学び、医局員たちに教え、進めていかれた歴史は、いつ聴いても、共感させられる。さらに、「苦しんでいる人が訴えてくるのを待ってはいけません。注文を取りに行かない」とか「痛いままに放置しているのは恥なことです」と全国の緩和ケアチームや腫瘍医たちが背筋を正して聴くべき金言が繰り返された。

間の取り方が絶妙で、自らの弱きも含めお話になるため、聴く者たちは、ほほえましく思われ笑顔になつたり、ホロリとしたりするのであつた。

特にご自分のお病気のことをおっしゃったときに、自分の主治医の方が先に冥土に次々と旅立ってしまうと、少しさびしそうに、でもちょっと愉快そうな顔をなさっていたが、与えられた天の定めを素直に生きていらっしゃると感じさせられた。

最後に自作の俳句をご紹介された。『死ぬ刻(とき)を知らぬから いい曼珠沙華』死生観が凝縮されている句である。

その後、聖マリアンナ医科大学病院長、三宅良彦教授より温かいご挨拶をいただき、講師おふたりへ

の記念品・花束贈呈で講演会は終了となった。

直後の懇親会にもほとんどの参加者が出席され、おふたりのご講演に対し大きな賛辞を述べていただいた。平均年齢は、過去に私が参加した会では最高だった気がするが、しゃべる口も食べる口もまだまだ若い面々であった。

会の終わりに、井上先生の奥様が「この日が無事

に迎えられ、話し通せて、感謝です。医者と結婚して、50年以上主婦をやってきて、本当に幸せだと思っております」とご挨拶くださり、その奥様を見つめる井上先生のお顔も拝見し、参加者みんなが幸せに包まれたクリスマス間近の虎の門の夜となった。

(井上先生、白土先生、そして多くの協力者の皆様、ありがとうございました。)

第16回 総会・研究会を終えて

東京医科大学病院 緩和ケアチーム 山田 公人 柏谷 優子

お天気にも恵まれた残暑厳しい9月18日(土)午後、年度総会に続いて『ギアチェンジの理想と現実—がん治療のなかで—』をテーマに、今年度の研究会を開催いたしました。会場とした東京医科大学病院の360名収容可能な臨床講堂をいっぱいになりたいと準備をし、それには及びませんでした。当日は151名の方々が参加してくださいました。企画は大きく2つ。看護師のためのワンポイントレッスンでは『患者に寄り添う—あなたにできること—』と題して、病と苦悩を抱えながら歩む患者のパートナーとして、看護師はどう寄り添えば良いかを学んでいただきました。その後、当院のがん相談窓口担当者から、当院における治療・療養目標の変更(ギアチェンジ)支援の実態報告を行い、シンポジウム『ギアチェンジの理想と現実—がん治療のなかで—』につなぎました。7名のシンポジストが、治療と療養の目標を治癒から病との共存に変更すること、それを患者が受けとめられるよう支援することについて

語るなかで、それぞれの理想と現実が提示されましたが、問題点を明確にして、改善するための行動で議論を重ねることができませんでした。この続きは、これからの診療や療養支援のなかで各自が考えていくべき課題であると受けとめました。

開催校として研究会の企画運営を終えて振り返ってみると、開催までの約1年にわたる準備だけではなく、緩和ケアチームが約3年間積み重ねてきた当院の緩和ケア提供体制の結果も、今回の研究会に反映されていたのだなあとしみじみ思うこの頃です。これからも日々、チームで真摯に課題に向き合っていきたい、そう思います。このように思える、これが研究会開催校の、そして“大学病院の緩和ケアを考える会”に参加をしている役得なのでしょうね。仲間がいるって有難いことです。

ご参加、ご協力いただきました皆さま、どうもありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願いたします。

第4回日本緩和医療薬学会年會に参加して

昭和大学病院薬剤部 桑原 久瑠美

第4回日本緩和医療薬学会年會が2010年9月25、26日に鹿児島市民文化ホールで開催された。近年、薬剤師は医師および看護師と共に積極的に緩和医療に取り組んでいる。しかし、医師や看護師に比べると、薬剤師は臨床業務の歴史が浅いため、緩和医療への取り組みが遅れ、多くの薬剤師が知識および経験不足を感じている。このような状況下、日本緩和医療薬学会は、薬学研究者、病院薬剤師、保険薬局薬剤師の連携の強化を図り、緩和医療の進歩と発展を目的に活動し、緩和医療に取り組む薬剤師の質的

向上を目指している。本年會のテーマは「みんなでふくらまそう—こころでつなぐ緩和医療—今、知識を深めて実践へ—」とされており、多くのシンポジウムが設けられた。「鎮痛補助薬の現状と将来の展望」のシンポジウムでは、基礎研究として「新規抗うつ様作用を有する鎮咳薬チペピジンの鎮痛薬および鎮痛補助薬としての可能性」、臨床研究として「臨床における鎮痛補助薬の現状と将来の展望」や「鎮痛補助薬としてのケタミンの有効性」の発表が行われ、基礎研究者と臨床研究者での活発な討論が繰り返

広げられた。本年会の参加者は3000名を越え、多くの薬剤師が緩和医療の重要性を感じていることを実感した。

私は2年目の病院薬剤師で、今年の4月から耳鼻咽喉科病棟で緩和医療に携わっている。緩和医療に精通している医師、看護師と共に、日々緩和医療に関わっているが、まさしく知識と経験不足を痛感しており、また他施設の現状を把握したく、本学会に参加した。シンポジウム、口頭、ポスター発表では、新たな知識の習得や、様々な施設の現状を把握することができた。中でも特に、私は徳島赤十字病院の薬剤師の「能動的な症状緩和への関わりー急性期病院においてー」の口頭発表に刺激を受けた。徳島赤十字病院の薬剤師は、急性期病院において忙しさを理由に介入すべき緩和医療を必要とする患者さんの見落としを回避するために、初期アセスメントシ

ートを作成している。初期アセスメントシートは患者さんの症状・症状がある部位・症状が起こる時間・使用している薬剤の4項目から成る。その時ちょうど私は、業務の忙しさを理由に患者さんの気になる症状を経過観察にしまい、非常に後悔したところであった。初期アセスメントシートは忙しい業務の中でも簡便に見るべきポイントの確認と見落としの回避ができ、また記録に残すことができるため、とても有用であると考えられた。なによりも、私はこの発表に勇気もらった。今後、当院でも緩和医療を必要とする患者さんに対してアセスメントシートを作成する予定である。

最後に、パワースポットと言われている桜島に行き大自然に癒され、また鹿児島の名物である黒豚を堪能し、心身共にリフレッシュした学会であった。

〇●クールダウン〇●「酒とインコとパチンコと家族」

川崎市立多摩病院 伊藤 優子

私はがん性疼痛看護認定看護師・病棟師長として、毎日多忙な日々を過ごしている。そんな中でも看護師として働き続けられたのは、公私の切り替えと多くの支えがあつたのことに痛感している。この題名は、私の充実した生活そのものである。どこかで聞いたような題…。

「酒」以前は夜勤以外毎日呑んでいたお酒も回数が減り、随分安上がりになった。「今日は頑張ったから呑もう。」「今日は疲れたから呑もう。」と何度言っただろう。週に2日位でカロリーオフの柑橘系缶チューハイ1~2本を呑み、大満足で気分転換できている。

「インコ」私のインコ好きはあまりにも有名である。動きが鳥っぽいと何度言われただろう。MAX20羽以上いた子供達は、現在11羽。まるでオウムの様にでかいオオホンセイインコ1羽、髭の生えたダルマインコ2羽、頬がピンク色の小桜インコ8羽と愉快的暮らしをしている。よくおしゃべりし、なついているので一人で家にいても寂しさはない。「この子供達の美味しいご飯を買う為に頑張って働かないと。」と仕事に精を出す。こんなに可愛がっていても逆襲されることも多く、外出してから洋服や頭についたバーディーミサイル(いわゆる糞)に気付いたり、

電化製品や貴金属・書類をボロボロにかじられたりしている。でも、疲れて帰った時の雄叫びと可愛さには癒される。ご近所迷惑に違いないが、何をやっても握りつぶしたいほど可愛い子供達に完全ノックダウンである。

「パチンコ」私の大いなる副業(本業かも)である。運動が苦手なインドアゲーマーの私にとって、パチンコは絶好の気分転換である。休日の午後、のんびり家事・昼食を済ませて行く職場。「神様が安いお給料を気の毒がって、臨時収入をくれた。」と思いつつ、大当たりの快感を楽しんでいる。端玉のお菓子は幸せのおすそ分け。ちなみに最近カラオケで歌う曲は、もっぱらパチンコの大当たり曲である。

「家族」間違いなく精神的支えである。看護師の姉、同居している妹、近くに住む両親、そしてインコ達。私の職業を理解し、多くの支援と癒しをもらってここまで頑張れた。いつも感謝している。恩返しは副業の収益還元と在宅看取りだと思っている。

こんな文章を読むと誤解される方もいるので、念のため。私は緩和ケアに情熱を注いでいるごくごく普通の看護師♡ これからも「酒とインコとパチンコと家族」と緩和ケアを愛する大切な仲間と共に、楽しみながら看護師人生を歩いていくつもりである。